NEWSLETTER
保育・子育て総合研究機構だより

2016.2.1 発行　NO.37

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

座談会　「いま、何が大事なのか」を語り合う　その１

今回（No.37）と次回（No.38）の２回にわたって、全私保連運動推進委員会、研修部、本研究機構研究企画委員会の代表３人が「いま、何が大事なのか」について、それぞれのフィールドから語り合います。

［出席者］（敬称略）

岡村　斉●全私保連運動推進委員会委員長

安達和世●全私保連研修部部長

鈴木眞廣●全私保連保育・子育て総合研究機構代表
同機構研究企画委員会委員長

＊お話の進行は、鈴木委員長

うまく伝わらない

鈴木●この座談会をお願いしたきっかけは、戦後70年、日本社会が大きく変わり、保育制度も変わろうとしているこの時期に、研究機構だけでなく、運動推進委員会や研修部とともに、“いま、何が大事なのか”、語り合わなきゃと思ったからです。

「そもそも教育って何だろう」と考える手掛かりを得るために、機構の委員たちと汐見稔幸先生（白梅学園大学学長）との対談が「保育通信」に、「シリーズ・乳幼児教育を考える」として企画・掲載されました（計24回、2012年11月号～2014年11月号）。その対談の中からいくつかのキーワードを拾って冊子にしたのが、『乳幼児教育の真を保育園からとらえ直そう―日本の保育・子育てのグランドデザインへの招き』（2015年９月発行）なんです。「子どもが主体」というけれど、実践の中ではわかりづらいという声もあって、そこを掘り下げようとしたんです。

今までは、保育者が主体になって、子どもに知識をいかに効率よく授けるかという保育をしてきた。でも、これからはそうじゃなくて、育つ側、学び手の側に視点を移して、子どもはどう学び、どう育とうとしているのかを捉え直す、そのための一つのツールとして、本研究機構は『わく ワーク シート』をつくって会員に届けてきました（2016年２月現在、計７冊発行）。

「こどもとであう」「こどもとみる」「こどもとともにいきる」をテーマにした『わくワークシート』なんですが、どうも現場では活かされてないなあと感じるんですね。“メッセージが伝わりにくい”というナヤミは、研修部や運動推進委員会でも、あったんじゃないのかなと思うのです。

運動推進委員会や研修部では、どのように進められてきたのか、そこから聞かせていただきたいのです。

岡村●運動推進委員会としては、今の社会の変化とか、現代の家族の構成だとか、いろいろな視点から考えると結局、「子どもの最善の利益」を保障することが大

乳幼児教育の真を
保育園からとらえ直そう
―日本の保育・子育てのグランドデザインへの招き

A5 判・32 ページ
本体 500 円＋税
公益社団法人全国私立保育園連盟
http://www.zenshihoren.or.jp/

きなテーマになったんです。保育の原点である「子どもの育ち」「子どもの心の育ちを支えること」、それから「親が育つこと」、この３つの点から、自分たちの実践全体を振り返って、自分自身に問いかけることから始めたんです。

運動推進の具体的な事業として、「子どもの心の育ちをどう支えていくのか」というテーマを設けて、会員にも共通認識をもっていただこうということになり、鯨岡峻先生（京都大学名誉教授）と一緒に全国で運動シンポジウムを展開してきたわけです。

その中で鯨岡先生は、「今、教育は力をつけることばかりが前面に出ている。保護者受けする保育じゃなくて、子どもの心、子どもの自己肯定感を育んでいくことが重要だ」とずっと述べられてきたんです。声に発せられないような心に寄り添って、子どもの思いに向き合う、そういう「養護の働き」が必要といわれてきました。

鯨岡先生は「接面」という言葉を使われるのですが、声に発せられないような子どもの心の声を、ちゃんと聴こうとしているかどうか、そのためには、私たちが変わるんだと、全国のブロックシンポジウムの中でずっと伝えてきたんです。で、本当に理解してもらえるように、今年度からは保育実践事例を挙げてもらい、それに鯨岡先生がコメントするようにしたんですね。

鈴木●なるほど。

岡村●ところが、私たちの思いがまったく伝わってないような事例も出てくるんです。「心の声を聴くことが大切だ。そのためには私たちが変わらないと」っていっているのに、保育者の自己満足というか、子どもが頑張ってやれたのは、（保育者の指導で）子どもの心が動いたんだというふうに受けとっている人たちも多くて、なかなか真意が伝わらないんですね。伝えていく難しさを痛感した１年でしたね。

それは、園長、主任、保育士、この三者が共通認識をもちながら、「いまのままじゃ駄目だ」、子どもの心を育てるという方向に、保育園が舵を切らないと難しいことだと思うんです。

鈴木●でも、随分、園長さんたちや主任さんも聞きにきてくれたでしょ。

岡村●はい、聞きにきてくれました。

鯨岡先生の講演を聴いて８割以上が「よかった」というようなアンケート結果は出てくるんです。けれども、本当に私たちが意図するような思いが伝わっているかどうか、ハテナマークが浮かびますね。

鈴木●私は、運動推進委員会がここ何年か、ブロック単位のセミナー（講演会）を開いて、そこにみんなが聴きにいくっていう、求心力をつくったのはすごいって思うんですが。

岡村●“鯨岡ファン”はたくさんいるんです。でも、やっぱり鯨岡先生が意図するところの真が伝わってないんですね。何が原因なんでしょうね。

鯨岡先生の意図じゃないことでも、保護者から「よかった、すごいね」っていわれることが、保育士の喜びになってたりして、本来は子どものほうを向かないといけないのにね。

鈴木●保育を語る対象が「力」から「心」に変わっただけで、子どもへの“働きかけ方”っていうか、“まなざし”が変わってなかったんじゃないかなと、いま聞いてて思ったんだけど。

岡村●「力をつけるのをやめなさい」ということではなくて、力をつける前に心が育ってないと、力ってつかないでしょ。だから基礎として、子どもが自己肯定感をもって、自分は大切だ、愛されている、社会の中でも大切な一人なんだって気になる、そこからならOKですが、とにかく「私が教えたものをちゃんとやんなさい、そしたらいい子に育つわよ」みたいなものが保育者の中にあるんじゃないですかね。

鈴木●「心を育てる、支える」って言葉は変わっても、外から働きかけて変えようとする保育者と子どもの、向き合い方が変わってないんだね。そんな感じがするんだよね。

研修部では、どんな話がされてきましたか。

身体性＝体を通して力に

安達●今の運動推進委員会の話を聞いていて、研修部も同じように、「子どもの最善の利益」を大切にしようっていうのが基本のスタンスとしてあるんですね。今年度は「乳幼児期の教育って何だろう？」をテーマにしていますが、ベクトルをどこかに向けようかっていうことは特にないんです。今は「教育」という言葉がすごくデリケートになっているので、この「教育」を考える素材をいろんな方向から投げようっていうのが、今年度の研修部のスタンスなんです。

先ほどからお話の中に出ていることと共通するのは、“体を通さない限り、自分の力になっていかないんだろう”なっていう思いです。

このことは、私たちも常に感じるところです。その力になる、手助けになる材料は何だろうって、いつも考えています。

鈴木●“体を通す”ってどういうこと？“身体性”ってこと？

安達●身体性もそうですし、哲学とか、そういうものすべてを、まず自分の体験を通さないと自分も納得できないし、次の一歩も踏みだせないんじゃないかっていう考え方に辿り着いたんです。

なので、ファシリテーションとかワークショップとか、いろんな手法を通して、自ら学んでいくことを提案しようっていうのが、研修部の、いまのやり方なんですね。

鈴木●難しいね。

安達●ええ。なので今年度は、学校教育、教育と養護、保育も、どこでどんなふうに定義されているのか、どんどん見つけだそうっていうことを、みんなでやっているんです。

鈴木●その中でいま、何か具体的なものが見えていますか？

安達●今の段階で形が見えているもの…？

う～ん、私たちが育ってきた学校教育では、“チョークアンドトーク”という「教授型の学び」に慣れているので、私たちが研修を企画する時も、どうしても「教授型の学び」の提案をしてしまうし、受けとる側もそういう学びだったら自分の中で学んだっていう実感を、すごくもってしまうんだと思いますね。でも、本当はそうじゃなくて、「自らが学ぶ」、この姿勢を創らない限り、私たちがいろんな提案をしても題材が違っているだけで、“受けとる側のとり方”は変わっていかないんですね。

つまり、私たち保育者が変わっていかない限り、子どもや同僚や保護者との関係は、絶対変わっていかない、そこまでは見えてきたんです。なので、ワークショップなんかを通しながら、自分で考える、自分が経験しながら体得していくこと、そういう意味で、身体性につながっていくのかな、というふうに思ってはいるんですけど。

鈴木●自らがかかわりながら体得していくって、つまり授け型ではなく参加型というか、自分から考えていく。研修の形式も変えていくってこと?!

安達●例えば、「教育って、じつは何だろう」って自分で考えて、自分がその学び手になっていかない限り、次の段階へはなかなか進めないっていうのが、今の研修部の到達点っていえるかも、ね。

いろんな先人の知見とかなんかを出して紹介しても、その時だけ理解したつもりになって広めたつもりでも、先ほどの話にも共通しますが、持続していかないし、その学んだことがまわりにも伝わっていかないっていうもどかしさがあります。でも、8000園以上の会員園の皆さんが、本当はいろんなところで悩んだりしているじゃないですか。そこにこそ種をまきたいんです。その学び手（子ども）に視点を置けば、私たちが提案していくことって、いっぱい出てくるんじゃないかなって思います。

鈴木●その視点の当て方を変えるというのが、すごく難しいんだよな。

安達●ええ。なので、この「保育のグランドデザインをみんなで考えませんか」っていう提案は、いま全私保連運動が取り組んでいる「心の育ち」と２本立てになると思うんですよ。

「子どもが育つ」ってどういうこと？と、その「子どもたちにどういう願いをもって育てるの」っていう私たちの願い、この２本立て。つまり、重層的に学びを創りだすことをしないとね。う～ん、でも、それって難しいかな。

鈴木●さっきの岡村さんの話じゃないけれど、「これからはこれが大事」とそれをただ並べても、そもそも

の子どもとの向き合い方が変わらないと。それって、私たちが越えなきゃいけない一番大きなハードルだなって思っているんだけれど…。

以前、安達さんに話したけど、平成元年版の幼稚園教育要領と翌年（平成２年）の保育所保育指針から、乳幼児の教育や保育の理念は大きく舵をきったんだよね。子どもは主人公になって遊び、生活をし、その中から学び、育ち、保育者はそれを支える、応援するという視点にね。指導者側の視点から、学び・育つ側に視点を移した。

あれから26年経っても、相変わらず先生から授ける型の保育を抜けだせないのは、なぜなんだろう。

保育現場は厳しい

安達●保育の現場って、年々厳しくなっていると思うんですよ。私たちは、子どもたちに失敗してそれを活かして立ちあがることが大切だよって研修で教わるけど、教わった自分たち自身が失敗できないんですよ。私たち大人も試行錯誤をしなければ、ね。

鈴木●それは、私たちが受けてきた教育が、試行錯誤する間を許さない、そういう教育だったよね。

安達●それもあるし、いまの保育をめぐる状況が、余裕がなくなって、柔軟性っていうか、多様性を認めづらい環境もあると思うんです。

いまの保育現場の人たちって、知識はもっているし、こんな保育がいい方向なんだという理解もよくできていると思うんですよ。でも、思いきって実践し、展開する状況に至らない。

何か許されない風土でもあるのかな？

岡村●いま、保育士が働いている保育環境というのが、鯨岡先生の研修で学んで、もう少し子どもの心に寄りそってみようって、そこまでは思っても、それが許される状況が保育現場にはないような、そんな厳しい状況にあるということなんでしょうね。

鈴木●例えば、指導計画も、保育雑誌で選んだものが宝物になってしまう。すると、指導計画通りにやれたことがいい保育になり、それ以外のことは許せなくなる。すると、失敗できないとか、時間の中できちっと収めないといけないことになってしまう。子どもの声を聴いてほしいのだけれど、聴いて予定と違うことになったらそれは困る。だから、「いまはダメ、それは後にしてね」になって、つい保育者の決めた価値を押しつけてしまうような話がよくある。

安達●でも、本来は、子どもとの対話の中で柔軟性をもって変えていくっていうのが、カリキュラムの定義じゃないですか。幼稚園教育要領や保育所保育指針の中でも、柔軟性を説いているのに、ね。

鈴木●岡村さん、どうですか。

岡村●う～ん、保育の中の養護の観点が抜けている気もするけどね。もう一度、自分たちの保育を振り返って原点回帰っていうのかな。それをやらないと難しいだろうと思うんです。

ただ、それをやるためには、数人の職員だけがいい話を聞いてきて、それを持って帰って実行しようと思っても、保育現場全体がそういう状況であるならば、ハテナマークがつく。やっぱり園長、主任を含めて園全体でそれにしっかりと取り組むような風土をつくらないと難しいと思うんです。

一人だけで変えようと思っても、安達さんがいわれたように、いまの保育現場っていろんな書き物があって時間に追われてしまう状況の中で、それをこなさないといけないという部分もある。どれくらいたいへんなのかって、アンケートを採ってみたいですよね。思いはわかるけれども、実際、やれてないっていう人も多いんだと思うんです。

鈴木●自分が子どもの頃といまを比べると、ものすごく社会が複雑になっている。20年、30年先はもっと世界が複雑になって、いまもっている知識や経験では、解決できない難しい問題が起きると思うんだよね。

そうすると、この子たちがそういう世界を担ってい

くには、教えられたことしかできないのでは乗りきれない。こうすればよいということも、いまの私たちにはわからないんだから、子どもたちを信頼して託さなきゃいけない。未来の大人たちが、自ら考えて次代を切り拓いていかなきゃいけない。

となると、葛藤したり、調整したりしながら乗り越えていく、そういう経験をいっぱいため込んでおくような教育、保育が必要だと思う。

変わることの先に何がある

安達●何年か後に小学校の学習指導要領が変わりますよね。その中で、「問題解決能力」っていうのが、身につけてもらいたいものの一つだっていう柱が立つみたいですね。

そうすると、いまの私たちの価値観を一生懸命教授したって、それが何十年か後には通用しないかもしれない。それこそ問題解決、自分で考えて自分（たち）でそれを乗り越えていく。これって、「アクティブ・ラーニング」っていうんですよね。

じつは、保育園ってその問題解決能力を、日常的に学んでいる場なんですよね。ということは、小学校がそのように変わっていくっていう状況が生まれた時に、保育園でいまやっていることがもしかしたら…。

鈴木●上にシフトしていくっていうこと？

安達●小学校との接続（連携）を考える時に、小学校の予備軍みたいな意識があるけれども、じつはもっと大切なところを保育園は育てているんだよっていうことを小学校に返せる感じがしますね。

そうすると、この「保育のグランドデザイン」の方向性っていうのは、すごくいい題材になっていくのかなっていうふうに思うんですけど。でも、それをみんなで考えるっていうのは、なかなか難しいっていうのはありますけどね。

鈴木●この「ニューズレター」のNo.36（2015年9月発行）で、佐伯胖（さえきゆたか）先生（東京大学・青山学院大学名誉教授）の講話を紹介しました。そこに、文科省・中央教育審議会会長の安西祐一郎さんのこんな話が出てくるんです。

「いま、中教審は教育のあり方を本気で変えよう取り組んでいて、考える人を育てるとか、ディスカッションしたくなるような人を育てることを考えている。そこで、まず大学が変わる、センター入試を変える、すると高校が変わる、高校が変われば中学も変わるだろうって、下へ降りてこようとしている。

そういう流れがある一方で、保育の世界では小学校との接続（連携）の中で、さっきの先生主導の授業に一日も早くなじませるか、合わせるかっていうことばかりが議論されていて、それはこの大きな流れと逆流している」と。

それから、平野朝久（ともひさ）先生（東京学芸大学教授）が、

「まだ学んでない人の学び方は、失敗もしながら、紆余曲折し、試行錯誤を繰り返していく。だけど、一度学んじゃうと、そういう回り道を全部削除して、一番手っ取り早い方法だけが身について、今度教える側になると、その手っ取り早い方法を教える」

とおっしゃっているんですね。

岡村●そっちを教えちゃうんですよね。

鈴木●効率性や合理性で教えちゃう。本当は学び手にとって試行錯誤がすごく大事なのに、そういう時間を保障することが重要なのに、失敗できない、正解を出さなきゃいけないんだっていう強迫観念をもたされて、そこから、どうやって自分たちが抜けだせるかっていう話だよね。

岡村●子どもたちも、そういう力って、恐らくいま、与えられてないですよね。カリキュラムに沿ってやっていくわけなんで。子どもたちが試行錯誤できる時間をどんな形で与えていくか、子ども自ら試行錯誤しながら、解決策を見つけられるようにするか、っていうような問題ですね。

安達●研修部内で、ちょっと視点を変えたほうが整理がつくのかなって話し合ったことがありました。

それは、「子どもの最善の利益」にかかわるんですけど、子どもが権利の主体者であり、その権利は国際法上で守られているもの（守らなければならないもの）なのだという、その視点から考えたほうが、もしかしたらすっきりするんじゃないかって、話し合ったんですね。

子どもには学ぶ権利があるし、子どもは発達する権利があるし、意見を表明する権利がある。権利が保障されているっていうところから自分たちの仕事を考えると、それはしてあげてることではなくて、「権利を守る仕事」をしているっていうことになる。そっちのほうがすっきりするよねと、研修の組み方を変えたこ

ともあるんですね。

「子どもは権利の主体者」というと、日本の中では仰々しい感じはするんですけど、そっちの視点に変えて考えるほうがいいかも。

鈴木●「権利」というと難しく考えがちだけれど、汐見先生の指導教官だった大田堯（たかし）先生（東京大学・都留文科大学名誉教授）が、「権利とは、金持ちとか、逆に貧乏とか、平和な国とか、戦争をしている国といったように、生まれた環境に差はあるけれども、その差を越えて等しく平等に与えられたものであり、それは命なのだ」と。

その命が、与えられた条件、環境の中で輝いて生きられるように支えていくのが、その子どもに与えられた権利を守るってことなんだよね。

けれども、どうも私たちは、こうあるべきという態度で、ああしなさい、こうしなさいの「上からの押しつけ型」（意識下で働いてしまう権威性）で向き合ってしまう。私たちの癖っていうのか、そういうのがあるんだよね。

岡村●押しつけってありますよね。

よくある話ですが、先生たちが、子どもたちが喜ぶように一生懸命考えて活動し、子どもたちもすごく楽しそうに遊んでいて…。ところが、その時間が終わったら一人の子どもが「先生、遊びに行っていい？」っていったっていうね。

この時、子どもたちにとっては、先生が与えた遊びは遊びじゃなかったんですよね。自分たちの中で自主的にやりたいのが、本当の遊び（学び）なのに。

遊びといっても押しつけがあったり、それはもうお二人がいうように、私たちが受けてきた“上から授ける教育”が染み込んでいるから、それから脱却できないっていうことでしょうね。

鈴木●そういう教育の仕方って、日本ではたかだか明治以来、150年くらいの歴史しかないんだよね。もっとその前の長い時間は、そうじゃない育ち方、学び方っていうのをしてきたのに、明治政府が進めた教育方法が正しいって、いつの間にか自分たちも思い込んでいたというのがあって。

でも、それは、明治維新や戦時下の富国強兵とか、戦後の高度経済成長などには役立ったのかもしれないけれども、これからは恐らく違う。

戦後70年、もっと複雑になっていく社会の中では、先人がつけた意味をただ覚えるだけの学びだけから、「第２の教育観」へシフトしないとね、って思っています。

岡村・安達●「第２の教育観」って？

＊次号に続く

（**まとめ**／**片山喜章●**保育・子育て総合研究機構研究企画委員会副委員長）

わく ワーク シート動画版
新しい教育観シリーズ１－１
ただいま作成中です。乞うご期待！

❖問合せ
公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880／FAX 03-3865-3879
URL http://www.zenshihoren.or.jp
E-mail ans@zenshihoren.or.jp